

岩見沢市におけるサケの飼育・放流活動について

○榊原郁子^A、小梁川博子^A、赤間由美^B

○SAKAKIBARA Ikuko^A, KOYANAGAWA Hiroko^A, AKAMA Yumi^B

北海道教育大学岩見沢校^A、岩見沢市立朝日小学校^B

サケの飼育、環境教育、溶存酸素量

1.はじめに

1つの小学校で始めたサケの飼育・放流活動が、長い間サケがのぼってこなかった川にサケを呼び戻した。このことがきっかけとなり、学校、市民、行政が一体となったサケの飼育・放流と川をきれいにする活動が発展している。この活動は、子供にも大人にも生きた環境教育になっているので報告する。

2.岩見沢市におけるサケの飼育・放流活動

岩見沢市内を流れる幾春別川は、石狩川に合流しているので、明治の中頃まではこの川にもサケの遡上が見られた。その後、上流に炭鉱が開かれ石炭を洗った水などによる汚染が進み、サケの遡上も見られなくなった。

赤間の勤務校であった岩見沢市立美園小学校と、根室の小学校との交流の中から「サケの飼育」「放流活動」が始まった。1987年に初めて幾春別川に放流したサケが、4年後の1991年に戻ってきたのが観察され、このニュースが岩見沢市民に大きな感動を引き起こした。この年の12月、千歳市の水産庁サケ・マスふ化場から種卵の供与を受け、市内の小・中・高6校、市民団体でサケの飼育活動が始まった。1995年度は、保育所や大学も含めて64ヵ所でサケの飼育活動が行われ、16,000匹の稚魚を放流した。1991年から、毎年サケの遡上が確認されその数も増加している。今年度は、捕獲調査の許可が得られた。将来、自分たちの手で採卵・受精したサケを飼育・放流したいと考えている。

また、「幾春別川をよくする市民の会」が作られ、サケの飼育・放流活動とともにサケ遡上観察キャンプ、リバーサイド・サイクリング、ふるさとの川づくりの学習会や講演会を行って

いる。また、付近の住民も参加して川岸の植栽活動、魚道の設置など幾春別川の環境改善も進んでいる。

3.サケの飼育方法と成長記録

飼育場所により飼育方法や成長の速さはことなるが、1例として小梁川の記録を紹介する。

水槽は45×90×45(cm)のものを使用した。水温はクーラーで8℃に保ち、循環式のろ過装置で水を浄化した。ろ過装置から水が落下する際にエアレーションが行われる。

12月7日 発眼卵300粒を水槽に入れる。

(受精後約50日経過したもの)

12月19日 ふ化が始まる。

1月26日 底で静かにしていた仔魚が中層を泳ぎ始める。餌づけを始める。

2月10日 卵囊もほとんどなくなり稚魚になる

4月10日 約5cmに成長した稚魚を幾春別川に放流

4.サケ飼育水槽の溶存酸素の測定

水に溶けている酸素の量(溶存酸素)は、低温の方が多く、温度の上昇とともに減少する。

いろいろな飼育環境6ヵ所を選び、サケ飼育水槽の溶存酸素を測定した。12月中旬の餌づけ前の時期であったが、いずれも飽和に近い酸素がとけていた。

岩見沢市ではサケの飼育に水道水を使用している。水道水の溶存酸素も測定した。蛇口から出てくる水は、室温近くまで暖められているときでも、取水池の水温に相当する酸素を溶かし込んでおり、冬期間は0℃付近で酸素を十分溶かし込んだ水を補給できることが確かめられた。